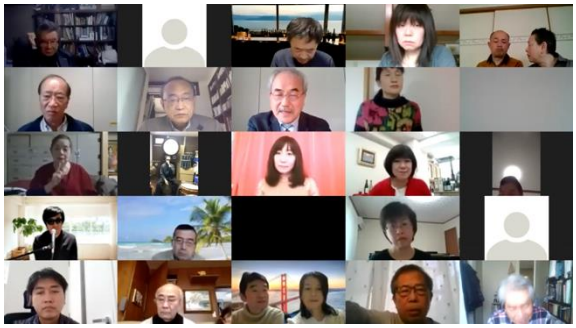
分割された画面には様々な顔が並ぶ。本棚を背にした大学教授、防災の専門家、元県知事、アマチュア棋士、全盲のヴァイオリニストとその仲間たち、海外からの参加者、聴覚障がいの女性、手話通訳者‥。「コロナに負けない」を合言葉に、震災復興、防災、福祉、教育、囲碁、音楽など、多彩な分野の有志が集い誕生したオンライン双方向参加型動画放送局「みらクルＴＶ」の放送画面だ。



「みらクル TV」開局記念特番放送中の画面
（2020 年 4 月 11 日放送）

コロナに負けない～みらクルＴＶ（前）

巣篭もり状態の中の主要メディアに

2020 年 4 月 11 日、新型コロナウィルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が首都圏を含む 7 都府県に出される中「みらクル TV」は開局した。開局特番の冒頭、代表の木谷正道さん（72）は「孤立と孤独は何よりもつらく寂しいものです。」と語りかけ、「互いに希望を持ってつながり合うために」と開局を宣言した。次いで番組編成部長の原香織さんが「自粛の中でもより充実した日々を過ごせるように（中略）‥出演者と視聴者が身近な感覚で楽しむことができるオンラインテレビ局です。」 と発足の趣旨を説明した。続いて元宮城県知事・浅野史郎氏の司会によるフォーラム「みらクル TV に期待すること」、後半は全盲のヴァイオリニスト・和太鼓奏者・シンガーソングライターらによる各地からのリレーコンサート、メインプログラム終了後も放送は続き、番組出演者や視聴者の間で分割画面越しに井戸端会議風の自由なコミュニケーションが展開した。

「みらクルＴＶ」がネット放送のツールとして採用しているのは、PC・スマホ用の web テレビ会議システム Zoom だ。新型コロナウィルス感染の拡大で、在宅勤務、オンライン教育へと世の中が大きくシフトする中で一気に広まったアプリケーションのひとつだ。テレビ会議用のツールを視聴者参加型の放送用として用いたところに「みらクルＴＶ」の斬新さがある。

多彩なつながりが多様なコンテンツへ

WHO がパンデミック宣言を出した 3 月上旬、知人の紹介で Zoom を使った囲碁対局のデモ映像を観た木谷さんは「これは凄い！」とその可能性に感動し、「これは巣篭もり状態の中の主

要なメディアにできる」と考えた。同時に巣篭もりが終わった後も社会の中心的なメディアになる、と直感したという。

「みらクル TV」代表 木谷正道氏

元々木谷さんは、東京都庁の職員として長年勤め、1980 年代後半以降首都直下型地震を見据えた産業経済対策、95 年の阪神大震災、2000 年の三宅島噴火による全島避難などに政策・企画畑職員として対峙してきた。こうした経験から、災害時における情報爆発などの混乱から命を守るためには、平時から信頼できる人の繋がりを持つことが重要と考え、東京いのちのポータルサイトなど、様々な防災団体・NPO 活動に携わってきた。07 年に退庁してからも、南三陸や大船渡など東北の復興支援に関わり続けている。木谷さん自身バンド活動をするミュージシャンでもあり、父親が20世紀を代表する囲碁の名人棋士であったことから、「音楽」と「囲碁」が木谷さんの復興支援活動の経糸になっている。こうした取り組みを通してつながった、防災、障がい福祉、音楽、囲碁など多分野の人々が木谷さんらの呼びかけに応えてそれぞれの発信を担うことで「みらクル TV」の発足へとつながった。多彩な人脈がそのまま多様なコンテンツに反映している。

コロナ後の世界を見据えて

開局して1ヶ月半、見えてきたのは「このメディアの桁違いのパワー」だという。これまでのストリーミング放送や動画投稿サイトに比べても、ハードルが低く誰でも参加でき、ほぼ無料か廉価で運営できること、何より、双方向でお互いの顔を見て声を聞きながら出演者と視聴者がその場で自由にコミュニケーションできる効果などは、既存の TV 放送やネット放送を凌駕している。「共感の素地を作るという意味で大きな可能性のあるメディアです」と木谷さん。「コロナは大変な厄災ですが、我々がリアルにものを考える機会を取り戻すとことができたという意味で、再生に向けての大きな一歩になると考えています。現在の状況が収束した後、情報の流れが変わり、人と人のつながり方も変わり、社会が変わる、その時、このメディアは私たちが既存の壁を超え新たなフェイズに進むきっかけになるのではないでしょうか。」と期待を語った。次回「みらクル TV」の多様な編成とコンテンツを紹介する。

欄外）

「みらクル TV」では 6 月 12 日−14 日、初のオンライン大規模イベント「北九州市民 ZOOM 囲碁まつり」を開催する予定。視聴・参加は http://miracletv.site/ まで。